

Title	日本企業における負債の役割
Sub Title	
Author	久保, 朋司(Kubo, Tomoji) 大林, 厚臣
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	2003
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2003年度経営学 第1851号 可能
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002003-1851

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

論文要旨

所属ゼミ	大林 研究会	学籍番号	80228216	氏名	久保朋司
(論文題名)					
日本企業における負債の役割					
(内容の要旨)					
<p>本論文の研究目的は、財務分析、資金調達行動分析を通して、企業が負債をどのように利用しているかを明らかにし、負債利用について考察していくことである。電機、建設、小売業界を調査する。</p> <p>財務分析から、以下の結果が得られた。本質的に企業の価値創造に寄与しない金融資産比率が高まっている。トレードオフ理論的な最適資本構成を想定して、負債資本比率をコントロールしていると思われる。財務レバレッジ上昇は、業績不調による財務的な穴埋めのために負債が利用されている可能性が高い。高収益な（売上利益率の高い）企業は、負債資本比率が低い傾向が確認され、財務レバレッジが低くとも、ROE が業界内でも相対的に高い。</p> <p>資金調達行動分析からは、今回のリサーチでは十分ではないが、金利、株価の状態などを考慮して、キャッシュアウトを最小化する資金調達方法を選択する可能性が確認された。</p> <p>以上の分析だけでは、十分検証できるものではないが、これらの特徴や、調査の過程で主観的な感覚から、次のような問題点が感じられた。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 経営者、既存株主と投資家の間に、エージェンシーコストが発生している可能性があるのではないか。 2. 株式による資金調達を低コストと捉えている可能性があるのではないか。 3. 負債の正の側面である節税効果などを十分に活用していないのではないか。 <p>企業が、金融資産比率を増大させ、相対的に利益率の高い、実物投資の割合が低下していること。株価が好調なときに増資を実施する傾向が強く、企業価値がより高く評価されているときほど増資を行っていること。高収益企業は概して低い財務レバレッジとなっていること。これらは、いずれもエージェンシーコスト発生の可能性を示唆するものである。また、企業が、キャッシュアウトを最小化する資金調達方法を優先して選択するとすれば、資本コストを意識していないことを意味する。</p> <p>また、エクイティ・ファイナンスを低コストであると認識し、資金調達の中で最優先しているとするれば、同時にこれは、負債の持つ積極的な側面である節税効果、規律付けなどが評価されていないことをも意味する。すなわち、支払金利が高い資金調達方法＝高コストの資金調達、と捉えられている可能性が高い。今回調査した電機業界、建設業界、小売業界において、資金調達方法は、戦略的に選択されているとは言い難い。</p> <p>より効率の良い企業価値創造を推進させるには、資本市場からの規律付けは不可欠である。企業経営者、投資家双方に高い意識が求められている。</p>					